E.SHIBUSAWA ［逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え］

text：渋澤 健

第13回

「宿命」と「運命」

逆境の時こそ、力を尽くす

逆境に立たされた時。ああ、なんと自分は運が悪いんだ…と嘆くことがあるでしょう。

一方、渋沢栄一は様々な人生のピンチをかいくぐりながらも、数多くの功績を築いた偉人であり、世間一般からは強運の持ち主と思われているかもしれません。

ただ本人は、そもそも人生とは運の良し悪しではないと示しています。

「とにかく人は誠実に努力(どりょく)黽勉(びんべん)して、自ら運命を開拓するが宜い。もしそれで失敗したら、自己の智力が及ばぬためと諦め、また成功したら智恵が活用されたとして、成敗に関わらず天命に托するがよい。かくて敗れても飽くまで勉強するならば、いつかは再び好運に際会する時が来る。」

（「論語と算盤」成敗は身に残る糟粕(そうはく)）

渋沢は、運とは決まっているものではなく、自らの行いによって自らつくるものであると考えていたのです。

確かに「宿命」と「運命」を比較すると、前者は「宿る命」です。自分の誕生日、生まれ場所、「親ガチャ」（生まれた家庭環境）など人生において生まれた時から決まっていることが宿命であり、変えることができません。

一方で、「運命」とは「運ぶ命」です。自らの行いで自分が接点を持つ人々や自分を置く状況によって運ばれてくるもの。つまり、運命とは変えることができるのです。親ガチャで恵まれていない家庭環境に生まれたとしても、それで運命が決まったわけではあるまいと、渋沢は激励を飛ばすでしょう。

そんなのは勝者視点の論という否定は、努力を拒むことであり、努力を放棄していることになります。運命に対して誠実ではないどころか、強いていえば自らの可能性を否定する残酷な考えです。自ら動くことがなければ、誰も命を運んでくれません。

しかし、実際の日本社会では、努力しているのに報われることなく、むしろ八方塞がりに陥り、自ら命を絶つという痛ましい事件がないとはいえません。期待通りに事態が進まないことに絶望し、自ら命を絶つという生物は悲しいかな、人間しかいません。

それは、人間だけが自然界で「価値」を生きることの要としているからでしょう。特に成功することに価値があり、失敗することに価値がないと思い込んでしまい、苦しい心境に陥ります。

渋沢でさえ、長い人生で築いた数多くの成功事例よりも、失敗の方が多かったのではないでしょうか。失敗とは、渋沢が前述で示している「勉強」と置き換えれば、まさに運命の開拓へとつながるといえます。

そもそも、渋沢は

「一時の成敗は長い人生、価値の多い生涯における泡沫(ほうまつ)のごときものである」

（同上）

と考えました。つまり、いずれは弾けるバブルであるということです。

渋沢は多くの価値を創造し、長い人生を全うしました。その長寿のヒントを次のように示します。

「苟(いやしく)も事の成敗以外に超然として立ち、道理に則って一身を終始するならば、成功失敗のごときは愚か、それ以上に価値ある生涯を送ることができるのである。」

（同上）

我々凡人が、渋沢の偉業を真似できないことは確かです。ただ、道理に則って生きることで、自分を超越する価値をつくれるのも自然界で人間だけです。この世に生まれてきた、それも人間として。この時点で、運が良かったといってもよいのではないでしょうか。